

語りと人称

——葛西善蔵『椎の若葉』論——

伊藤 博

はじめに

葛西善蔵が寄宿していた鎌倉建長寺内の宝珠院が本堂を残して関東大震災（1923・9・1）によって倒壊したために、葛西がその場所から東京本郷区弓町の西城館に移動し、そこに下宿することになるのは、震災後まもなくのことである。葛西は1925（大正14）年4月に世田谷三宿に移るまで、西城館で暮らしているが、ここで葛西は、後に作家となる『改造』の編集者古木鐵太郎の筆記によって、「椎樹の若葉」（『改造』1924・7、のち短編集『椎の若葉』（新潮社、1924・12）に収録の際に、タイトルを「椎の若葉」に改題し、短編集のメイン・タイトルにしている）を口述することになる。古木鐵太郎はその時の状況を、『椎の若葉』といふ小説は、あれは私が談話筆記したものである。（中略）あれは午後の三時ごろから始め、翌朝の午前三時ごろまでかゝつたものだ^①と語っている。

古木鐵太郎「年譜」^②によれば、談話筆記が行われたのは1924（大正13）年6月15日のことである。葛西は1928（昭和3）年7月23日に亡くなっているので、『椎の若葉』を発表してから、その命は残すところ、あと4年しかなかったということになる。震災を体験し、運よくその難を免れ、なんとか生き延びることができた葛西は『椎の若葉』でいったい何をどのように語ったのであろうか。

1 冒頭と末尾のテキスト分析

本節では、テキストの枠組みの内容を具体的に検討し、次にその枠組みとそ

れに挟み込まれた内容との関係を考察する。最初に、テキストの冒頭と末尾の箇所をそれぞれ引用し、比較・検討することから議論を始めよう。

六月半ば、梅雨晴れの午前の光りを浴びてゐる椎の若葉の趣を、ありがたくしみじみと眺めやつた。鎌倉行き、売る、売り物——三題話^{ママ}見たやうなこの頃的生活ぶりの間に、ふと下宿の二階の窓から、他家のお屋敷の庭の椎の木なんだが実に美しく生々した感じの、光りを求め、光りを浴び、光りに戯れてゐるやうな若葉のおもむきは、自分の身の、殊にこのごろの弱りかけ間違ひだらけの生き方と較べて何という相違だらう。人間といふものは、人間の生活といふものは、もつと美しくある道理なんだと自分は信じてゐるし、それには違ひないんだから、今更に、草木の美しさを羨むなんて、余程自分の生活に、自分の心持ちに不自然な醜さがあるのだと、此の朝つくづくと身に沁みて考へられた。(中略) 本能といふものゝ前には、ひとたまりもないのだと云はれ、ば、それまでのことなんだが、何うにかなりはしないものだらうか。本能が人間を間違はすものなら、また人間を救つてくれる筈だと思ふ。椎の若葉に光りあれ、我が心にも光りあらしめよ。(傍点・引用者、以下同じ)

ぼつねんと机の前に坐り、あれやこれやと考へて、思ひのふさぐ時、自分を慰めてくれ、思ひを引き立て、くれるものは、ザラな顔見知合ひの人間よりか、窓の外の樹木——殊にこのごろの椎の木の日を浴び、光りに戯れてゐるやうな若葉ほど、自分の胸に安らかさと力を与へてくれるものはない。鎌倉行き、売る、売り物——三題話のやうな各々の生活——土地を売つた以上は郷里の妻子のところに帰るほかない。人間墳墓の地を忘れてはならない。椎の若葉に光りあれ、僕は何處に光りと熱とを求めてさまよふべきなんだらうか。我輩の葉は最早朽ちかけてゐるのだが、親愛なる椎の若葉よ、君の光りの幾部分かを僕に恵め。 ——大正一三年六月一五日——

冒頭を読んで気付くのは、貧富の格差の象徴ともいうべき二階の「下宿」と「他家のお屋敷の庭」の二項対立的な世界の境界領域に生育する「椎の若葉」が最近の「自分」の「生き方」や「生活」に対する参照項となっていることである。「光りを求め、光りを浴び、光りに戯れてゐるやうな若葉のおもむきは、自分の身の、殊にこのごろの弱りかけ間違ひだらけの生き方と較べて何という相違だらう」という冒頭部分の「自分」の「若葉」への感情を移入する表現は、末尾では「殊にこのごろの椎の木の日を浴び、光りに戯れてゐるやうな若葉ほど、自分の胸に安らかさと力を与へてくれるものはない」というように、「自分」は「椎の若葉」に生きる意志を見出し、その心境は明らかに質的な変化を遂げている。

初出時のタイトル「椎樹の若葉」が後に『椎の若葉』に変更されたことから分かるように、「草木の美しさを羨む」ことで、「自分の生活に、自分の心持ちに不自然な醜さがある」ことの自覚が、人間よりも植物、さらに、椎の木というよりは、陽光を浴びて「光りに戯れてゐるやうな若葉」に、この「自分」は生きる力と安心を感じているのである。しかも、口述によって表現された、冒頭の「椎の若葉」から受け取った「おもむき」を媒介に、「自分の身の、殊にこのごろの弱りかけ間違ひだらけの生き方」の反省を促す語りが、末尾の「ザラな顔見知合ひの人間より」も「光りに戯れてゐるやうな若葉ほど自分の胸に安らかさと力を与へてくれるものはない」という語りに遠く接続し、「このごろの」という句によって形容された「生き方」と「若葉」が照応関係になっていることで、このテキストの枠組みは、かなり強固に構築されている。

冒頭の「自分」は英語の「I」のように歴史汎通的・単一的という意味では日本語には存在しない人称代名詞の代理としての自称詞^③の一種であるが、末尾では、その自称詞は「自分」から「僕」に、そして「我輩」、最後にまた「僕」へと目まぐるしく変化し、冒頭のように、ほぼ「自分」だけに統一した表現になっていないことにも留意しなければなるまい。冒頭の「自分」というのは、三浦つとむがいうように、「『自分』と意識するのは観念的な自己分裂によって

成立した観念的な自己であり、そのときの観念的な自己はもはや『他人』の立場に立って『自分』をながめていることになる^④」、自己対象化した三人称的自称という側面をもっている。たとえば、「人間の生活といふものは、もつと美しくある道理なんだと自分は信じてゐる」という言い方は、「自分」は別の観念世界、つまり、「人間の生活といふもの」という位相に観念的に移行した「自分」から〈いま・ここ〉の「自分」の意識を捉えた表現であって、語りかける相手を必要とはしない自己完結した自称である。また、冒頭の最後、「椎の若葉に光りあれ、我が心にも光りあらしめよ。」の「我が」は「椎の若葉」との関係性において存立する自称であるといえよう。

引用した末尾部分の自称についていえば、その後半、「殊にこのごろの椎の木の日を浴び、光りに戯れてゐるやうな若葉ほど、自分の胸に安らかさと力を与へてくれるものはない」という表現において、「自分」は「自分」自身、と同時に読者一般に向けての語りは「椎の木」の「若葉」が「自分」には必要不可欠な存在であることを主張している。次に続く、「土地を売つた以上は郷里の妻子のところに帰るほかない」という表現は、現在の「自分」が置かれた立場を文字通り自分自身に言い聞かせることで、語る「自分」と語られる「自分」との関係はここでは一度閉じている。しかし、次の「人間墳墓の地を忘れてはならない」という言い方には読者を含む人間一般を念頭に置いた「自分」の強い意志が明示され、先に閉じた「自分」の意識が人間世界へと開かれている。

さらに、「椎の若葉に光りあれ、僕は何処に光りと熱とを求めてさまよふべきなんだろうか。我輩の葉は最早朽ちかけてゐるのだが、親愛なる椎の若葉よ、君の光りの幾部分かを僕に恵め」の「僕」の悲痛ともいえる自問自答は聞き手であり筆記者でもある古木への語りかけになっている、と同時に読者一般に訴えかける方向に向かっている。そしてそのすぐ後の、「我輩の葉」というように擬植物化した逆擬人法とでもいうべき表現は、このテキストにただ一度だけ登場した「我輩善蔵君」から「善蔵君」を切り離し、揶揄・自嘲・パロディ化を避けた「我輩」となっている。ここでの「我輩」という言い方は『椎の若葉』

で、唯一、「我輩善蔵君」と自己言及的に語られている箇所と通低はするものの、その役割・機能はまったく異なっている。そのことを確認するためにも、「我輩善蔵君」が登場した箇所を引用し、さらに検討を続けよう。

おせいの親父には借金も残つてをるし、おせいの姉のおとめさんからも金を借りて、それがみんな証書になつてをる訳なんだが、さりとて、僕としてはそれ程弱く出なければならぬ理由もないやうに思つてゐるんだ。いろいろと両方に言ひ分もあり、事件といふものはこんがらかつて来ると、結ばれた糸をほぐすやうな根気と誠実さがなければ駄目なんだ。彼等の言ひ分は重々尤もではあると思ふが、また我輩善蔵君としても、震災以来のナシについてはやはり遺憾に思つてゐるんだ。つまりおせい君はその間に挟まつて何う身動きも出来ないやうな状態なんぢやないかな。(傍点・本文)

葛西善蔵が対象化した「我輩」という一人称と「善蔵君」という三人称的固有名を統合した「我輩善蔵君」という呼称は、鎌倉での暴力事件を自己言及的に振り返った文脈において使用されていることに留意したい。つまり「我輩善蔵君」という呼称は、葛西自身が起こした暴力事件の内容が新聞紙上で報道され、「創作家葛西善蔵氏」というかたちで氏名と職業が世間に公表されるといったスキャンダル・ジャーナリズムの格好の話題となったことへの揶揄・自嘲・パロディの意味を込めた表現なのである。おそらく、古木にカタカナで表記させ、さらに強調を意味する傍点を振らせた「震災以来のナシ」という表現も、震災による大量の死傷者や種々様々な社会的混乱といった災難、人々の生活形態や意識の変化といった受難、「おせい」の実家との金銭的な確執という難儀な問題といった震災以後の状況すべてを、この「ナシ」に充填させることも可能であつて、必ずしも「おせい」との同棲生活だけを暗示しているわけではあるまい。

むしろ重要なのは、「我輩善蔵君」が「ナン」の内容を個別・具体的に対象化して語ることを避け、抽象的に語らざるを得ないそのこと自体が、当時の葛西が抱え込んでいた様々な問題に対応することの困難さをアイロニカルに表現しているのであろうし、葛西が聞き手であり、筆記者でもある古木の存在を意識した言い方になっているのではあるまいか。とくに先の引用箇所「僕としてはそれ程弱く出なければならない理由もないやうに思つてゐるんだ」「結ばれた糸をはぐすやうな根気と誠実さがなければ駄目なんだ」「やはり遺憾に思つてゐるんだ」という話し言葉的な言い方は、葛西が語った口調を古木がそのまま筆記した典型的な例と捉えることもできる。

次に問題となるのは、末尾で使用されている「僕」という自称にふたつの形態が認められることである。「僕は何処に光りと熱を求めてさまよふべきなんだらうか」と疑問をもつ、この「僕」は聞き手に語りかけていると同時に、自分自身にも語りかける性格を有しており、自問自答しているという意味においては、この「僕」は先にも述べた「自分」と同様、自己対象化した三人称的自称詞の役割を担っている。

しかし、「親愛なる椎の若葉よ、君の光りの幾部分かを僕に恵め」と「若葉」に呼びかけている「僕」は、その語りかけている対象は目の前に存在している「椎の若葉」であって、それが植物であるがゆえに、当然のことながら、そこには応答関係が生じることはないが、この「僕」は実際に語りかけている「椎の若葉」を擬人化した「君」という二人称との関係を踏まえた一人称としての語り手なのである。この最後に登場した「僕」こそ、「若葉」を「君」と擬人化することで、筆記を担当している古木をも含む「ザラな顔見知合ひの人間」に象徴されるこれまでの一切の人間関係を断ち切る強固な意志をもった「僕」に生成しているのである。その意味では、この「僕」はこれまでこのテキストに登場したナイーブな「僕」とは決定的に位相を異にしているといわねばなるまい。

このように葛西は自称詞の機能を形式的にも役割的にも明確に区分すること

で、語り手の自己意識の細部に分け入り、これまでの孤独と不安の現在からなんとか脱却し、「椎の若葉」の生命力に触発されて、見えない将来に向けて必死に生きようとする姿勢を語り手に語らせているわけである。思えば、『椎の若葉』の冒頭部分で、「今更に、草木の美しさを羨むなんて、余程自分の生活に、自分の心持ちに不自然な醜さがあるのだと」実感し、「椎の若葉に光りあれ、我が心にも光りあらしめよ」という独白が、末尾では、「椎の若葉に光りあれ、僕は何処に光りと熱とを求めてさまよふべきなんだろうか。我輩の葉は最早朽ちかけてゐるのだが、親愛なる椎の若葉よ、君の光りの幾部分かを僕に恵め」と「椎の若葉」に語りかける「我輩」の孤独な心境は、より一層、祈りの強度を増している。「光りに戯れてゐるやうな若葉」と「最早朽ちかけてゐる」「我輩の葉」の二項対立は生と死の暗喩であることは明らかであろうし、葛西が「我輩の葉」というように擬植物化した「我」に仮託しているのは、咯血後、自らの生命の限界を見通した痛苦な心境以外ではないはずだ。

2 暴力・記憶・自己小説

竹浪直人は「葛西善蔵『椎の若葉』論——主人公の在り方を視座に——」^⑤で、「従来、額縁の内側部分については具体的な論証が行われて来ていないという印象を禁じ得ない」と述べている。「僕」が生身の人間ではなく、擬人化した若葉に対して祈の意味を正しく理解するためには、「椎の若葉」で語られた「額縁の内側部分」について検討しなければなるまい。

それは「鎌倉行き、売る、売り物——三題話」に関わっているが、ここではその中の「鎌倉行き」を取り上げ、さらに検討を続けよう。『椎の若葉』で、葛西は「十二日に鎌倉へ行つて来ました。十三日は父の命日、来月の十三日は三周忌、鎌倉行きのことが新聞に出たのは十三日なのです」と語っている。確かに、1924（大正13）年6月13日付の「読売新聞」（三面）は葛西が「十二日」に鎌倉に行ったこと、そしてそこでの暴力事件を報じている。見出しは、「恋人の——いきさつから葛西善蔵氏暴る 仲裁者の辜丸を蹴り昏倒さす」というも

のである。以下、その記事内容を全文引用しておく。

（鎌倉電話）作家葛西善蔵氏は十二日午後八時半頃泥酔して鎌倉町字小町飲食店松壽軒事^{こと}浅見すて方に上り込み主人及び雇人と激論の揚句暴行をやり器物を投飛ばし家人を殴打するなど散々暴れ廻り仲裁にはいつた隣家の金子才二（二八）氏の睾丸を蹴り昏倒させた騒ぎに警官は葛西氏を本署に同行し酔の醒めるのを待つて説諭放還した暴行原因は葛西氏が鎌倉建長寺に寄寓中境内に茶店を出してゐた前記松壽軒の看板娘花子（二三）と言ふ美人と恋に陥り震災後一度同女と帰京したが女の両親は葛西氏には妻子があるので娘を取戻さんと交渉したが言を左右にして応ぜず花子を創作の対象とするなどしてゐたが同夜も此の問題を解決せんと葛西氏を招いた処氏は酔つぱらつて来り話しが本筋に入らぬ前から乱暴狼藉を始めたので浅見方ではあくまで表沙汰にするとイキまいてゐる

この報道以前に、読売新聞社から葛西に事の真偽を問ひたす連絡が入ったことを、葛西は、『椎の若葉』で次のように語っている。

滅多に読売新聞社なんか、ら電話があることはないんだが、何うしたのかと思つて電話に出て見ると、僕が鎌倉のおせいの家で散々乱暴を働き、仲裁に入つた男の睾丸を蹴上げて気絶さしたとか、云々の通信なんだがそれに間違ひはありませんか、一応お訊ねする次第です——と云つたやうな話を聞き、ひどく狼狽した訳です。（中略）僕は何処までも小説のつもりで話してゐるのだから、いろいろ本当の名前を挙げては悪いのだが、僕は自己小説家だから云ひますが、読売新聞社が其の晩に電話を掛けてくれて、翌朝の新聞に何行かの僕の釈明を載せてくれたことは非常にありがたく思ふ。

葛西の釈明は、先に引用した暴力事件の報道と同じ紙面の、しかもその記事のすぐ隣りに掲げられている。「葛西氏は語る 悪意ある宣伝だらう」を見出しとして、「右につき葛西氏は『それに似た様な事はありませんが乱暴をしたとか酒をのんだとか器物を投付けたとか言ふ事は絶対にありませんそれは何等か悪意のあるものの宣伝ではないでせうか』と否認してゐた」というのがその記事の全内容である。暴力事件を報じた新聞記事の内容と、『椎の若葉』の口述の期日を参照すれば分かるように、この事件は『椎の若葉』を口述した、僅か三日前に起っている。従って、先に引用した「このごろの弱りかけ間違ひだらけの生き方」という言説は、まさに、つい最近の葛西自身の暴力行為を振り返った反省の弁でもあったわけである。

問題は、新聞紙上で暴力を振るったことや器物を投付けたことを、「絶対にありません」と釈明しておきながら、事件の三日後の談話では、「弱りかけ間違ひだらけの生き方」と語り直し、さらに「酔つたとみえるんですな。僕はどの程度の乱暴をしたか、それは知らないんだが、大体としては私は、手を以て人を打ち、人の器物を破壊し、人の体に怪我をさせるといふことは大変好かない。如何なる場合に於いてもそれは好かない」と語り、暴力を振るった、その「程度」については「それは知らない」と述べているわけである。「酔つたとみえるんですな」という自己客観化した言い方に葛西一流のユーモアを認めることもできる。

問題にすべきは先の引用箇所が続けて、葛西が「我輩の手は呪はれた手なんだ」と語り始め、以前に書いた「呪はれた手」という掌編小説に言及していることである。この「呪はれた手」という掌編小説は葛西の家族が郷里の父の世話になっていた1918（大正7）年頃、その実家において、葛西とおぼしき「彼」が、その「八つになる長女」と「義母の貰ひ子の十二になるお春」との諍いをめぐり、実家に世話になっている手前、「彼」が長女の頬を「二度ばかり平手」を打ち、その後、往来に出て、その行為を悔いるという物語である。鎌倉事件以前に、「如何なる場合に於いてもそれは好かない」と語った暴力を、葛西はす

でに長女に振るっていたわけである。

我輩の手は呪はれた手なんだ。「呪はれた手」といふ小品を書いたこともあるが、我輩の娘、いまは十四になるが、七八年前僕等がもつと貧乏な時代、郷里で親父どもの世話になつてをつた時分だつたものだから義理ある母の手前、不憫ではあつたが、娘の頬ぺたを打つた。打つて親父の家を出て、往来の白日の前に立つて見て、涙を止めることが出来なかつた。

(『椎の若葉』)

上記の引用箇所からも分かるように、葛西は自分の娘に暴力を振るった体験を一度は三人称の「彼」を主人公として小説に書いておきながら、その後、『椎の若葉』では、先の小説の内容に言及し、今度は「我輩」という自称詞を使い、過去を振り返り、自分自身の体験を語り直している。過去に書いたテキストの内容を、現在、語っている言説に取り込み、交錯・混合させることによって新たな小説を創作するのは葛西が度々使う小説手法のひとつである。いうまでもなく、このような表現方法は主人公を再構築していく一方で、物語の再構築にもなっているのである。その意味では、『椎の若葉』は、鎌倉における暴力事件や自分の娘に振るった暴力の記憶を辿り直しながら、「結ばれた糸をほぐす」ために、その責任の引き受け方を巡る葛西自身の心のゆらぎを語っているテキストであるといえよう。

先に引用・言及したように、「僕は何処までも小説のつもりで話してゐるのだから、いろいろ本当の名前を挙げては悪いのだが、僕は自己小説家だからいひますが」という葛西自らがその小説の方法意識を語る言説にこそ、小説というジャンルには虚構が当然含まれ、事実それ自体は決して誰も語ることはできず、従って、つねに事実からズレたかたちでしか、語ったり、表現することができないという原則が見えてくるはずだ。つまり、この場合の主人公＝語り手の過去に関わった事件に対する自己言及は、過去の事実それ自体を小説として

完全に再現することは原理的に不可能であるということなのだ。

おわりに

ジュディス・バトラーは、「私は物語を作り出しつつ、自分自身を新たな私たちで作り出し、過去の生を語ろうとする『私』に付加される語りの『私』を設定しているのである。語りの『私』は、事実上、それが語ろうとするあらゆる時間を物語に付加している。というのも、『私』が語りの視点としてふたたび登場するからであり、語りの『私』のこのような付加は、それが件の叙述に遠近法の固定点を与えるときには、完全には語られないからだ^⑥」と述べている。このジュディス・バトラーの考え方は、まさに『椎の若葉』の創作方法の解説と見なすことも可能である。要するに、過去の生を語ろうとする「私」に付加される語りの「私」は、先に分析・検討したように、葛西が談話において言及した自身の、かつての小説内容と『椎の若葉』のそれとのズレというかたちにおいて浮かび上がってくるのである。

また、ジュディス・バトラーは、「私は単に、私の過去について何かを伝達しているだけではない——それは疑いなく私のしていることの一部であるのだが。私はまた、自分が描写しようとしている自己を成立させているのであり、語りの『私』は、それが語りそのもののなかで用いられるたびに再構築されるのである^⑦」とも述べているが、それは、今、問題にしている葛西のテキストに即していえば、事件が三日前であれ、数年前であれ、語り手としての「自分」や「僕」が過去に引き起こした事件を語り直すことによって、「自分」を改めて描き、そして、同時に、その語りを通じて新たな「自分」や「僕」を作り上げていくということなのだ。

葛西のいう「自己小説」とは葛西が主人公や語り手を通じて「自己」を語りながら、しかし「自己」を完全に語りきることができないというアイロニカルな性格をもつものと理解すれば、葛西の考え方とジュディス・バトラーのそれとは、一種、通底する側面があるといえよう。

その首尾一貫しない語りにこそ、過去の暴力事件における葛西自身の責任の引き受け方を小説として説明することがきわめて困難であることを逆に証明しているといってもよいわけである。

このように、亡くなる数年前の葛西にはこれまでの書く行為の他に語る行為としての口述が加わったが、その口述こそ、書けない作家葛西を語る作家へと転回＝展開させたのである。口述筆記のスタイルは創作的にも生活的にも行き詰っていた「自己小説家」葛西を自己救済する試みであったといえよう。あるいは、「自己小説」というフィクションの作り手としての葛西が口述筆記をしてまでも作家として生き延びたいという覚悟の文学的实践であったと言い換えてもよい。すでに吐血していた葛西は、朽ちかけた葉に象徴されるように、おそらく、死期が間近に迫っていることを強く意識せざるを得なくなっていたに違いない。その葛西が震災による膨大な死傷者や数多くの家屋や建物が倒壊した地獄のようなこの世の風景を目撃したこととも相俟って、彼が切実に願ったのは「椎の若葉」から生を確実に引き受けることであった。その意味では、葛西の『椎の若葉』の口述は生き残った者として、死者に対して生きていくことへの責任の意思表示であり、それはまた、表現者葛西の状況に対する倫理的態度の表明であったといえよう。たとえその余命があと四年しかなかったとしても。

〔注〕

- ①「葛西善蔵」（『古木鐵太郎全集 三巻』1988・5、古木鐵太郎全集刊行会、所収）。
- ②「年譜」（『古木鐵太郎全集 三巻』1988・5、古木鐵太郎全集刊行会、所収）。
- ③鈴木孝夫は『ことばと文化』（岩波新書、1973・5）で、「自称詞とは、話し手が自分自身に言及することばのすべてを統括する概念である」と規定し、「現代日本語のいわゆる人称代名詞が、自分及び相手そのものを直接に指し示すことばをもたず、常に間接迂言的な表現を用い、しかも歴史にも頻繁に交替してきた」と指摘している。その意味では、「椎の若葉」末尾の自称詞の変化は日本語の特質に従った語りであったのである。
- ④『認識と言語の理論 第二部』（勁草書房、1967・8）の特に、「第四章 言語表現の過程的構造（その二）」を参照。
- ⑤『郷土作家研究第33号』（青森県郷土作家研究会、2008・6）。
- ⑥『自分自身を説明すること 倫理的暴力の批判』（月曜社、2008・8）を参照。
- ⑦注⑥に同じ。

* 討議要旨

山崎佳代子氏は、①葛西はどのような作家と交流し、どのような雑誌に作品を発表していたのか、②日本文学史における私小説の定義を発表者はどう考えるか、と訊ねた。それに対して発表者は、①1912年に『奇蹟』でデビューし、谷崎精二・広津和郎・宇野浩二などと交流を持った。先行研究では国木田独歩の影響も指摘されている。②従来の自然主義からの流れで私小説を導き出す捉え方ではパンが短く、平安朝の随筆文学や日記文学なども含めるべき。対象化された作中人物と作者がほぼイコールであるものと定義すべきである。その点からすると、作中人物と必ずしも等しいとはいえない虚構のテキストを書いた葛西を、いわゆる典型的な私小説作家とする定説には必ずしも同意できない、と答えた。

丁貴連氏は、レジュメに引用された葛西のテキスト冒頭を見ると、まず「自分」が登場し、その後に「私」が用いられている。この自称の用い方は二葉亭訳のツルゲーネフ作品でも同様であり、まさに葛西は二葉亭や独歩の影響を受けているのではないかと質問し、それに対して発表者は、「自分」といっても作者としての「自分」と、対象化された登場人物としての「自分」を混同するべきではない。葛西の場合、1人称で語られていても、あえて過去の小説テキストの登場人物を挿入するという戦略的な方法が用いられており、二葉亭や独歩の影響を単純に結びつけるのは適切とは思えない、と回答した。

小曾戸明子氏は、①「椎の若葉」のような口述筆記は小説の世界では一般的なのか、②筆記者の古木と葛西はどのような関係にあったのか、③レジュメに「午後の三時頃から始め、翌朝の午前三時頃まで」筆記した、とあるがこの筆記方法に何か意味があるのか、と訊ねた。発表者は、①大庭みな子等の例もあるが、口述筆記は少数派である。②古木は葛西の弟子筋にあたり、後に葛西の勧めで本人も小説や随筆を書くことになる。当初は作家と編集者という関係にすぎなかった。③一晩で一気に語ったものといわれるが、大枠の構想はすでに葛西の念頭にあったと思われる。古木は脱稿後の葛西の加筆・修正はないと述べている、と答えた。